

Press Release

2025 年 12 月 5 日

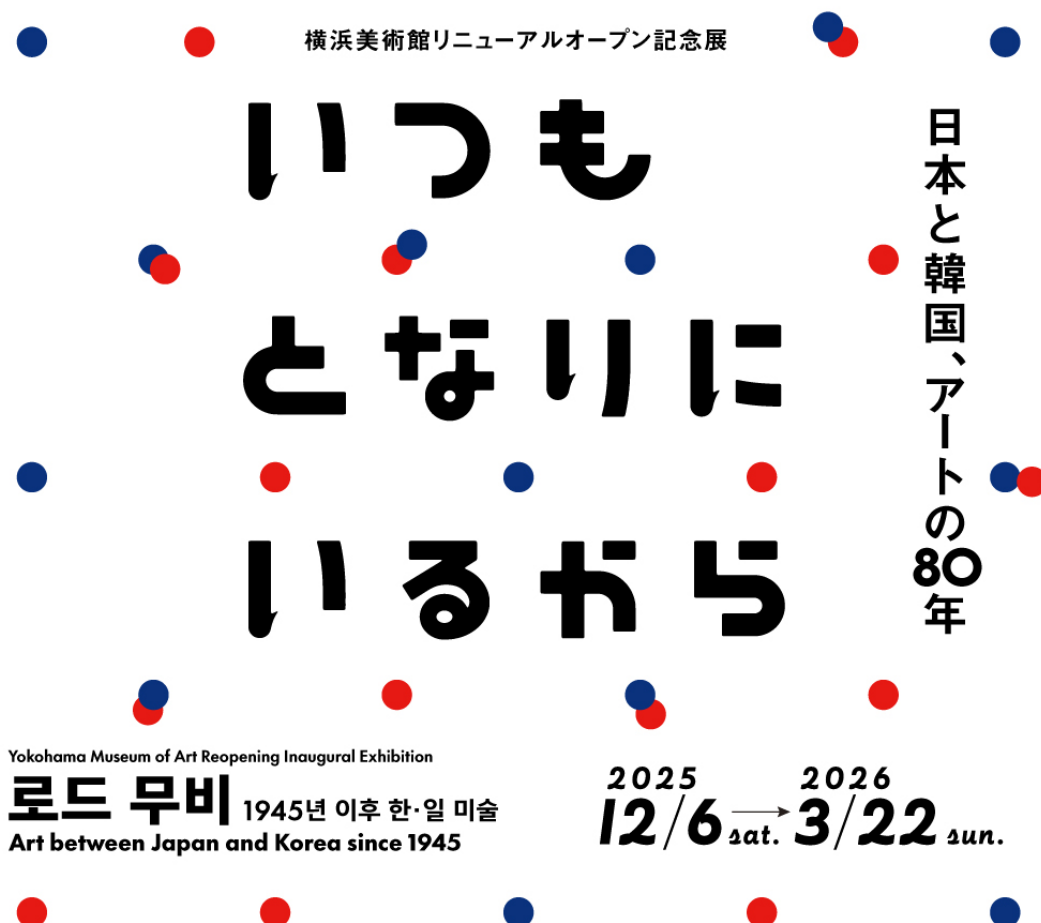


横浜美術館リニューアルオープン記念展

いつもとなりにいるから 日本と韓国、アートの 80 年

2025 年 12 月 6 日（土）～2026 年 3 月 22 日（日）

Yokohama Museum of Art Reopening Inaugural Exhibition
“Art between Japan and Korea since 1945”



横浜美術館
YOKOHAMA
MUSEUM OF ART



MCA 국립현대미술관
National Museum of
Modern and Contemporary Art, Korea

横浜美術館



横浜美術館リニューアルオープン記念展の最後を飾る企画展として、「いつもとなりにいるから 日本と韓国、アートの 80 年」を開催します。

地理的にも文化的にも近い他者として、長い歴史を歩んできた日本と韓国。

ドラマや映画、音楽、ファッション、メイクといった K カルチャーはいまや世界を席巻し、わたしたちにとって、韓国の文化はますます身近で、なくてはならないものになっています。

そんなとなりの国のことを、もっと知りたいと思いませんか。

この展覧会は、ゆたかな歴史を育んできた日韓両国のアートを通して、たがいの姿や関係性を、あたらしく発見しようとするものです。

あるものの特徴をよく理解するためには、別のものと比べてみる、というとてもシンプルな方法があります。アートを理解する時にも、この方法は有効です。

「いつもとなりにいるから」、刺激を与えあったり、時にぎくしゃくしたり——

けれども、アートを入口に「おとなりさん」のことを考え、わたしたち自身を見つめ直すことは、これから先もともに生きるための、勇気やヒントを得ることに繋がるはずです。

本展は、1965 年の日韓国交正常化から 60 年となる節目に合わせ、韓国の国立現代美術館との共同企画により開催します。

同時に、「おかえり、ヨコハマ」「佐藤雅彦展 新しい×（作り方＋分かり方）」につづき、横浜美術館リニューアルオープンの理念である「多文化共生、多様性尊重」を表現します。

みどころ

① 日韓の国公立美術館が、力を合わせて取り組む共同企画

両国の美術館が、およそ 3 年間のリサーチと準備期間を経て実現した展覧会です。

横浜で開催後、2026 年 5 月から韓国の国立現代美術館果川でも開催します。

② 50 組以上の作家による約 160 点の作品が、日韓両国から集う

韓国の国立現代美術館の所蔵品から優品 19 点が来日するほか、日本初公開の作品、本展のための新作もご覧いただけます。

③ アートを通して、知られざる 2 国間の歩みをたどる、国際的にも初の大規模展示

1945 年以降の日韓美術の関係史をひも解く、国際的にもはじめての展覧会です。

両国のアートを通して、わたしたちの現在地、そして、ともに生きる未来をみつめます。



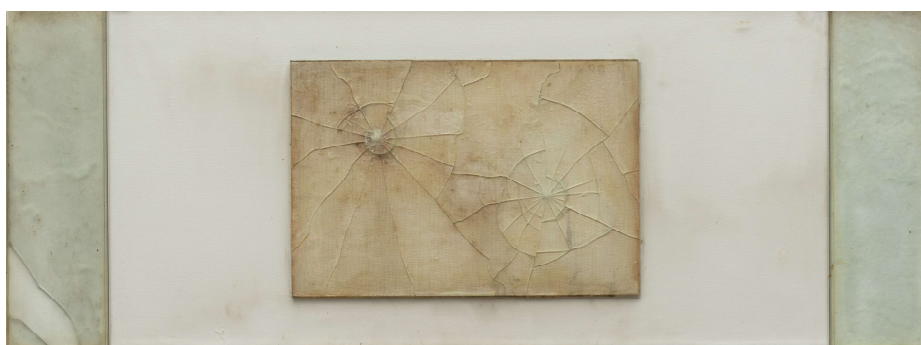
展覧会の構成

1章 はざまに—在日コリアンの視点

1945 年の日本の敗戦により、朝鮮半島は日本の植民地支配から解放されます。しかし、それとほぼ同時に北側をソ連軍、南側を米軍が統治することになり、1950 年に起きた朝鮮戦争を経て、半島は大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分断されました。そして、日本と大韓民国の国交が正常化する 1965 年までの約 20 年間、日本と朝鮮半島には正式な国交が結ばれていない時期が続きました。展覧会の最初の章では、日本と朝鮮半島の「はざま」にいた在日コリアンを軸に、この 20 年間をたどります。また、この時代をテーマとした 2010 年代以降の日韓両国の作品も展示することで、現在の視点から、国交の「空白期」をふりかえります。



曹良奎《マンホール B》1958 年
油彩、カンヴァス 130×97.3cm
宮城県美術館蔵



郭仁植《Work》1963 年
ガラス、麻布 46×120.7cm
国立国際美術館蔵 ©ギャラリーQ

2章 ナムジュン・パイクと日本のアーティスト

現在、世界的なビデオ・アーティストとして知られるナムジュン・パイク（白南準）は、日本の植民地時代の朝鮮半島に生まれ、1950 年に来日して、東京大学の美学美術史学科に学びました。その後ドイツ、そしてアメリカに渡り活躍しますが、パイクは日本語が堪能で、生涯にわたって日本のアーティストやクリエイターたちと親交を結びました。ここでは、日韓国交正常化の時期を前後して、同時代の日本の美術界と特異な立ち位置で関わったナムジュン・パイクを中心に、日韓のアーティストたちの繋がりを紹介します。



ハイレッド・センター《「シェルター計画」人体展開図写真（白南準）》
1964 年 写真 26.7×28.8cm
個人蔵
©Genpei AKASEGAWA, Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE



安齊重男《1970 年代美術記録写真集
「ナムジュン・パイク 1978 年 5 月 草月会館」》
1978 年 写真 27.9×35.6cm
東京都現代美術館蔵
©Estate of Shigeo Anzai, Courtesy of Zeit-Foto

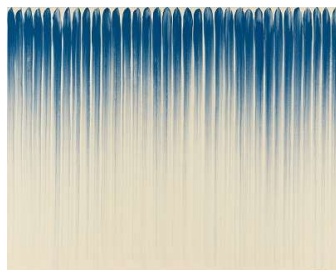


3章 ひろがった道 日韓国交正常化以後

1965 年、日本は朝鮮半島の南側である大韓民国とのみ、国交を正式に樹立しました。これにより、それまで公式な人や物の移動が難しかった両国間に、一気に交通が開けます。以後、日本では同時代の韓国のアートを紹介する展覧会が、規模の大小を問わず数多く開催されるようになり、韓国でも同様の動きが起こっていきます。この章では、1960 年代後半から 80 年代を中心に、両国の同時代美術がどのように相手の国に紹介されたのかをみることで、日韓のアート界がいかに刺激を与えあっていたかを探ります。



朴栖甫《遺伝質 1-68》1968 年
油彩、カンヴァス 79.8×79cm
国立現代美術館蔵
©PARKSEOBO FOUNDATION



李禹煥《線より》1977 年
岩絵具、膠、カンヴァス 182×227cm
東京国立近代美術館蔵 ©Lee Ufan



山口長男《軌》1968 年
油彩、板 182×182cm
横浜美術館蔵



郭徳俊《フォードと郭》1974 年
ゼラチン・シルバー・プリント
150×104cm
横浜美術館蔵

4章 あたらしい世代、あたらしい関係

1990 年、中村政人は韓国政府の国費留学生として美術大学の名門弘益大学に留学し、当時のソウルのアート界や、同世代のアーティストたちと繋がりを持つようになりました。植民地支配によって、近代期に多くの留学生が朝鮮半島から日本へ渡る流れがつくられましたが、アート界における逆流の先駆けが、ここで生じます。この章では、1992 年にソウルで開催された中村政人と村上隆による伝説的な 2 人展「中村と村上展」を起点に、同時代のソウルで活動をはじめていたイ・ブルの作品を紹介します。前章までの動向とは異なる、あたらしい世代による、あたらしいアイデア、メディアの作品が登場した時代です。



中村政人《トコヤマーク/ソウル》1992 年
韓国製床屋マーク、鉄他 161×φ130cm
個人蔵



5章 ともに生きる

韓国で長らく続いた軍事独裁政権は、民衆の力により 1987 年に終わりを迎えました。民主化に連帯する動きは韓国国内だけでなく、国外在住のアーティストにも広がり、アートと社会の問題がわかちがたく結びついた作品が生まれます。このような意識は現在のアーティストたちにもかたちを変えて引き継がれ、見過ごされがちな社会の問題を提起することは、いまではアートの大切な役割のひとつになっています。展覧会の最後の章は、現在、そして未来を「ともに生きる」ための気づきを、作品からみつけてほしい、そんな思いで締めくくります。



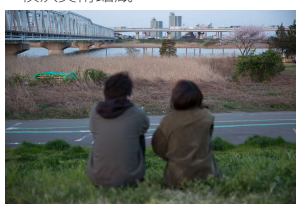
富山妙子《光州のピエタ》
1980 年 スクリーンプリント
49.8×63.7cm
横浜美術館蔵



百瀬文×イム・フンスン《交換日記》
2015-18 年 ビデオ 64 分
個人蔵



灰原千晶、李晶玉
《区画壁を跨ぐ橋のドローイング》
2015 年 デジタルプリント、色鉛筆
21×29.7cm
個人蔵



田中功起
《可傷的な歴史（ロードムービー）》
2018 年 ビデオ・インスタレーション
サイズ可変
個人蔵



高嶺格《Baby Insa-dong》
2004 年 インクジェット・プリント、
モニター、ビデオ（カラー、サウンド）
サイズ可変
個人蔵

関連イベント

スクリーニング&アーティスト・トーク

本展に出品される映像作品を横浜美術館のレクチャーホールで上映するとともに、作家本人と対談者らを招いて、制作背景やコンセプト、作品の持つ意味について語り合います。

1. 百瀬文×イム・フンスン《交換日記》（上映時間約 90 分）
2025 年 12 月 6 日（土）14:00～16:30 ＊日韓逐次通訳付き
登壇者：百瀬文、イム・フンスン、日比野民蓉（横浜美術館主任学芸員）
2. ナム・ファヨン《イムジン河》《Against Waves》（上映時間約 40 分）
2025 年 12 月 20 日（土）14:00～16:00 ＊日韓逐次通訳付き
登壇者：ナム・ファヨン、馬定延（関西大学教授、国立国際美術館客員研究員）
3. 田中功起《可傷的な歴史（ロードムービー）》（上映時間約 80 分）
2026 年の会期中を予定。
登壇者：田中功起、ほか

会場：横浜美術館レクチャーホール

Press Release



シンポジウム

日韓現代美術に関わる専門家を招き、より多角的に展覧会のテーマを検証します。
2026 年の会期中を予定。

その他のイベントや詳細は、決まり次第ウェブサイトにてご案内します。

最新情報

横浜美術館リニューアルオープン記念展「いつもとなりにいるから 日本と韓国、アートの 80 年」では、下記のグッズとメニューを会期中販売いたします。

ミュージアムショップ MYNATE（ミナト）

日韓のアートと文化をより深くお楽しみいただけるよう、特別なアイテムを取り揃えております。

【MMCA オリジナルグッズ 限定販売】（販売開始時期未定）

今回の展覧会を共同企画した、韓国の国立現代美術館（MMCA）ミュージアムショップのオリジナル商品を販売いたします。マグカップや、ステーションナリーなど、展覧会期間中のみお求めいただけます。



国立現代美術館（MMCA）ミュージアムショップ
オリジナル商品

【陶芸作家 オク・ウンヒさん作品 展示販売】

日韓それぞれでのご活動から、本展を機会に紹介したい作家として、オク・ウンヒさんの作品の展示販売を行います。

韓国李朝時代の民画やヨーロッパの古いタイルをモチーフに、可愛らしい器、色鮮やかなアクセサリーなど型にはまらない自由な作陶が特徴です。

【書籍・その他】

本展公式図録のほか、日本と韓国のアートや文化、文学などに関する書籍、グッズ、お菓子などを販売します。

カフェ 馬車道十番館 横浜美術館 喫茶室

「オリジナルメニュー 『いちごのおしゃべり』」

かつて馬車道十番館本館喫茶室にてご提供していた「かまくら」をモチーフに今回の企画展「いつもとなりにいるから」のコンセプトに重ね合わせた一品。粉雪（シュガーパウダー）が降り積もった中で仲良く寄り添う姿はいつもお互いを想っている気持ちが伝わってきます。

「いちごのおしゃべり」 1,210 円（税込） 各日数量限定。





開催概要

横浜美術館リニューアルオープン記念展 いつもとなりにいるから 日本と韓国、アートの80年

会期：2025年12月6日（土）～2026年3月22日（日）

開館時間：10：00～18：00（入館は17：30まで）

休館日：木曜日、2025年12月29日（月）～2026年1月3日（土）

主催：横浜美術館、国立現代美術館

協賛：李熙健韓日交流財団

助成：公益財団法人森村豊明会、公益財団法人野村財団、公益財団法人カメイ社会教育振興財団（仙台市）

イベント助成：公益財団法人ポーラ美術振興財団、公益財団法人吉野石膏美術振興財団

特別協力：国立国際美術館

協力：みなとみらい線

後援：駐日韓国大使館 韓国文化院、駐横浜大韓民国総領事館

観覧料：一般 2,000（1,900）円、大学生 1,600（1,500）円、中学・高校生 1000（900）円、
小学生以下無料、ペア券（一般2枚）3,600円

※（ ）内は有料 20名以上の団体料金（要事前予約 [TEL:045-221-0300]、美術館券売所でのみ販売）

※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方（1名）は無料。

※ペア券は、一般観覧券2枚組のセットです。一般観覧券を個別に2枚購入するより、400円お得なチケットです。2枚単位でご購入ください。2名様同時にご観覧する以外にも、1名様で別々の日に2回観覧も可能です。購入されたペア券を分配して別日にご利用いただけます。

※同時開催する横浜美術館コレクション展も、「いつもとなりにいるから」展チケットで観覧当日に限りご入場いただけます。

※一部、無料でご覧いただける作品があります。（ギャラリー8）

次回展覧会

没後110年 日本画の革命児 今村紫紅

2026年4月25日（土）—6月28日（日）

横浜美術館 〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1
TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317 <https://yokohama.art.museum>

[プレス画像申込はこちら](#)

お問合せ先 横浜美術館 広報担当（高野、高橋、岩見屋）
〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1
TEL：045-221-0319 FAX：045-221-0317 Email：pr-yma@yaf.or.jp